女紋

女紋

池田蘭子

河出書房新社

昭和三十五年一月二十五日印刷
昭和三十五年一月三十日発行

書名　女紋
定価　二九〇円

著者　池田蘭子
装幀者　鍋井克之
発行者　河出孝雄
印刷者　守安巖
発行所　河出書房新社
東京都千代田区神田
小川町三丁目八番地
振替・東京・一〇八〇二
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© 1960 印刷・東京印刷　製本・小高製本

女紋

おんな もん

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

「らっきょうも、二合半が二銭五厘……」

野太いまわり八百屋の声がして来た。

お敬は着ている小袖のふりの紅うらかえして指の爪をみがいていた手を、思わずほどいた。

「もう八百屋の来る時分かいな……さ、先生、お起きなされ。じきおひるでっせ」

すぐ、そばの床の玉麟に声をかけている間にも、表の方はざわめきだした。阿波座の町々は居職が多いせいか、夜があけると、一度に動きが活発になる。

居職とは家内職のことで、傘の骨に布を縫いつけるたぶづけ、シャツのボタンづけ、ムギワラ帽のピン皮張り、こたつの紙張り、下駄の花緒の芯作り、フスマの張り替え屋、活版屋の下請け、木型屋、女髪結などである。

錺屋のふいごの煙り、花緒屋が打ち出す麻糸のみじんぼこりなど、まだ春もやには早いが、空

の青さはうす葉を張ったように、阿波座はいつも汚れた感じの町だ。
「おこうやに昆布まき、あげさん、切り干し……」
また物売りの声が低い軒を通ってゆく。
それがこの二階まで筒ぬけだ。二階の二た間、一方は物干しに上がる窓が、上の方に物見のように開いてある。表道路に向いた方はひさしがずっと低いので、外を見ようにも、身体を二つに折らねばならない。しぜん、部屋はいつもうす暗い。
障子のところだけが、光を集めて明るい。
「それごらんなされ、もうおかず屋が来てますがな」
お敬が白い手を、さっと床にすべり込まそうとした瞬間、玉麟はついと起き上がった。
お敬のやりばのない手など、とんと気づかぬ玉麟は、すぐに背を向けてさっさと前を合わせている。
二人がいっしょに住んで二年に近い。ぶおとこのおっさんに、とびぬけてべっぴんのよめはん、容貌のちがいはあっても、だれから見ても夫婦であるのに、お敬は講釈師玉田玉麟を「先生」としか呼んだことはない。
湯だらいにうがい道具、しゃぼんとそろえながら、どれにも玉麟思いの神経が、細かく通っている。
やっと二人で夫婦膳をかこんだが、玉麟は時おりの受け答えだけ、無愛想に口もとを動かして

いた。
「先生、ぶぶ入れましたで……あっ、ご飯つぶが着物についてますがな」
「せわしのう言いなはんな」
太い指でまま粒をひろいながらぼやいている。
階下の人は傘のたぶづけ職だ。その子が、さっきから泣いたり止んだりしている。子供ずきの玉麟は桃尻立てても、お敬に気兼ねして、じっと階下の様子に耳を立てている。
おおかた、カステラ紙買いたいと五厘せぶっては泣き、やっと五厘にぎると今度は、紙ごと噛みついて涙を干しているのか。カステラを焼くとき下に敷く紙に、わずかにカステラがひっついているのを、駄菓子代わりに売っている。
二人がやっと箸を置いた時分には、近所はもう騒々しい、にぎやかな空気に埋まっていた。
物売りがつぎつぎと声を張って来る。
「一銭九厘やだっせえ、三宅油に椿油、くせ直しにびらんかずら（美男葛）も揃てます」
「荒物はどないだす、しっくい流しにカンテキ、やせ男……」
やせ男はお燈明につかう燈芯のことである。
居職の人たちは根仕事の肩休めに、売り声に誘われて門口に出て行っては、やかましい口合戦を始めていた。
しかし二階の二人はひっそりしたままだ。

「もう行こか」
「まあお待ちなされ、お湯がまだですがな」
「かまへん、夜さり風呂に行くよって」
「いきまへん、さ、おいでやす」
パラリと延べた花むしろの上に、手早く熱い湯桶を用意して、玉麟を引き据えるようにした。
熱い湯をふきふき、手拭をぎゅっと一しぼりして、
「早よお越しやす」
「ま、待って、顔だけはわしが拭く……」
手拭をとりかえては、まず衿もとから腋の下、入念にぬぐいきると、たっぷり天花粉をすり込んでゆく。
「待ってえな、こそばいね」
「やや子みたいなことといいなはんな、さ、こっちの手もお上げなされ」
胸もと、広い背中、身体のくまぐま、お敬の手のとどかぬところはない。
毎朝のことでも男にはじゃま臭い。自分の身体ぐらい勝手にと思うが、汗まで出して懸命になっている女には、ついつい手も払いかねた。
「もう足だけ——」
お敬はきゃしゃな身体をしなわせて、足の指は一本一本あつい湯でぐいっと拭きとって、これ

も指の股に、天花粉をすり込んでいった。お敬の五本の指はあやしい白さでひらめいて、まるで二人のたわむれのようでもある。玉麟ももうあらがわず、のほほんと大きな顔をゆるめて、気持よさそうにしている。

お敬は一心こめているのか、もう息をはずませていた。

「もう、ええで……」

玉麟はそろりと足を引きかけた。

お敬はそれにすがるようにして、

「先生、うちとこも、丸山はんか、小田はんにたのんで、講談本にしたらどないですね」

「また、言いだした」

玉麟は熱い湯気にもやもやと身体をほぐされ、ええ気色になっているのに、好まぬ講談本のことを口出しされて、せっかくの気分がこわされた。

玉麟は長年、日に何度となく両眼を水につけてはまたたくために、まぶたも赤く開いている。その赤目をギョロリとむきながら、

「講釈を本にするてなこと、あれは邪道や、わしはいやや、石川一口、あいつにまかせといたらええね」

「なんで邪道ですね」

お敬は引っ込めようとする男の足を、思わず力を込めてつかんだのか、玉麟のどっかりした胸

に、よろっとたおれかかった。
お敬の細身はまるで、玉麟の腕のなかに埋まってしまうようだったが、そのはずみに安ぶしんの二階の根太板が、ぎしっと軋(きし)んだ。
「なな、なにしてはんね、お敬はん……」
昼日中、こんなとこ、階下の人に覗かれてえへんかと、玉麟はあわてて両肌入れて、ちゃんと坐り直した。
「身体ばっかり大きゅうても、ほんまに気の小さい人……」
お敬には他人の前で、二人が夫婦らしいところを見られるのを、男がてれくさがるのがおかしかった。
ごみごみした阿波座あたりは、朝の物売りが一わたりすむと、昼前の手職に一ふんばりするのか、ふっとしずまってきた。
「行くで……」
玉麟はきせるをぽんと筒にしまうと、お敬もそれにつれて動きだした。
「下帯、かえはりましたやろな……もちょっと、じゅばん引っ張りなはれ……たばこ、いっぱい詰めはりましたか、葉ばっかりとちがいまっか」
お敬のこまかい心づかいに引き回されながら、玉麟の身支度はひとつひとつととのっていった。
それを見あげ見おろしながら、お敬は満足なうちに、それだけに——ほんまにこない押し出し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

といい、芸といい、こないに立派な人やのに、なんで万年中座で、真打ちにいつまでもなれへんのやろ——

口惜しさに気持がおさまらなかった。

——どうぞ一日も早う師匠玉田玉秀斎を襲名して、真打ちに昇進できますように——

お敬のいまの願いはそれだけであった。

やっと玉麟を、天満の昼席に送り出すと、お敬はいつもの虚脱と、焦燥の入り交った気持に追われていた。

いまもいそいそと席に出かける玉麟のうしろ姿には、前座も、真打ちもなにも眼中にはないのだ。ただ、高座に上がって張り扇を叩いておれば、それに酔うているのだ。そのことに満足しきっている。それがお敬は歯がゆくもあり、お人好しの男をふびんにも思えてたまらない。

水浅黄のじゅばんの衿に顎をうずめて考えに沈むお敬、そのくっきり白い額の生え際、鼻すじの通った横顔には、やはり伊予今治の旧家、日吉屋丑蔵の一人娘として、奥深くそだった権高さが残っていた。

——蘭引きにかけて、花々から香水を採り、全身に匂いをこめさせ、手はもとより足の爪先も、蘇芳の花で紅の色をつけ、磨きあげていたあの時分——

思いがそこに行きかけると、お敬は夢からさめたように、なにかに追いたてられる。

見まわす二階借りの二た間は、空しく、そしてうす暗さがただよっているばかり。

「そうや……」

なに思いついたのか、お敬は立ち上がるときりきりと、手順よく身仕舞をすませて、はしご段をいそいで降りていった。

どの家も貧しそうで暗い。木工、むぎわら真田のミシン掛け、それぞれの音や影のこもる阿波座の通りを、ぐいぐいと肩で押し返すように、勢い込んで歩きながら、お敬は人力車を呼びとめた。

「羽子板橋の北詰まで……」

走り出す人力車の上に、早春の肌寒い風がかえって新鮮であった。

去年の秋は、弟弟子にもひとしい玉窓が、師玉秀斎の兄、玉田玉芳斎の襲名披露をはなばなしく興行している。

その時もがっくりもし、やきもきしたのはお敬だけで、本人の玉麟は他人(よそ)ごとのように、暇さえあれば一人将棋を楽しんでいた。

「三吉さん、どないしたんやろ、とんと見えんな」

将棋友だちの坂田三吉は待っても、襲名には動じるふうもなかった。

お敬はそれではすまされなかった。思い立ったきょうのことは、どうでも成就させねばと、今から会いにゆく小田都三郎の応待を、あれこれくり返して考え込んだ。

大阪に講談本という新形式が現われたのは、明治三十三年のことだった。田鎖式速記の同門、丸山音次郎、小田都三郎の二人が、高座にかける講釈を速記し、それを講談本として貸本屋に並べたのだ。わざわざ寄席に出かけて聞くよりも、好きな時、好きなところで読める。時代の流れが、その好みにあった。

丸山音次郎は神田伯竜を口述者に、小田都三郎は石川一夢斎の子石川一口と組んで売り出した。天王寺、長柄、福島、野田、阿波座など、大阪の場末の貸本屋の人気はぐんぐん上昇するばかりだった。

口述者の伯竜、一口たちも、高座を休んでも速記に身をうちこみ、それで逆に高座の人気を高めていた。

それだけに、二人の速記者をめぐる講釈師仲間の割込み運動も、しだいに激しくなっていた。

「なァ先生。あんたは玉秀斎師匠から上方の話をうけはっただけやなしに、東京の放牛舎桃林師匠について来はったお人や。演しもんも多うおまっしゃないか……」

それならいま流行の講談本にうってつけではないか？――ことあるたびにお敬は玉麟を口説いてきた。だが玉麟は口の中で、もぐもぐとなにか言うだけで、いっこうに煮えきらないのだ。

「ほんとうに、はがゆい人」

いまお敬は、人力車の上でも歯軋りしたい思いがする。

羽子板橋の北詰で車を降り、聞いて来た近ごろ売出しの錨印風邪薬本舗を目印に、そこの路地

を曲った。

路地の石畳は、ずっと打水にしっとり濡れ、窪みに残った水には、季節の空の色が映っていた。

――抜けられます――と書いた小札が打ちつけてある。大店（おおだな）の通い番頭か、おてかけさんが住んでいるといったひっそりさ。

訪ねる小田速記者の家は、錨印本舗と本町の足袋問屋の隠居所に挾まれていた。

お敬は改まった気持で、その門口（かどぐち）にたった。

「玉田玉麟の……ふうん」

来訪を取り次がれた主（あるじ）の青白い顔は冷たかった。それが講釈師の名乗りだけに、用向きの内容はわかっている。主は痩せた長身に、細い影のある目を用心深く構えて客を待っていた。

机の上の鉛筆は速記用なのだろう。どれも同じように筋目たち、芯は鋭くとがっていた。火鉢の灰も山形にならし、床の間から座蒲団の据えかた。それらすべてが主小田都三郎の性格なのだろう、少しの歪みもない。縁側の障子紙はまっ白くぴんと張っている。それに射している残りの陽射しといい、なにかひんやり感じさせるものがあった。

そうした押し戻されるような空気の中でお敬はぴったり両手をついた。

「はじめまして……玉田玉麟の家内でございます」

人前に自分から玉麟の妻だと名乗るのは、これが初めてのことだった。そこには思い詰めた熱情と、育ちを見せた折り目正しさがにじみでていた。

構えていた主の表情に、ふっと動揺が見えた。
「玉麟さんのお連れあいで……」
「はい」
その目を掬いあげるようにゆっくり正面に据えたお敬は、早くも常の姿をとり戻しかけていた。
主はぱちぱち瞬きの音をたてるように、そんなお敬を見ていた。
すっきり梳きあげた片細黄楊の櫛巻き。白粉けを嫌った中高の顔に青い眉の剃りあと。清潔さの中に、磨ぎあげたものが匂っている。
北国福井に生まれて、生来雪の肌の美女は見なれているはずだった。だが、このようにみがきあげられた美しさは小田都三郎には初めてだった。
「いや、お話はわかります……しかし、今のところ、一口さんだけで、本屋のほうもいっぱいだし……どなたのもお断わりするほかないのです」
主は勿体をつけて、そう言っている。だが、お敬は主の顔にわずかに起きた変化も見逃してはいなかった。しぜんに頬にのぼって来る笑いを手の甲で押ししずめながら、ここ二、三日、寝た間も考え続けていた言葉が気持よく口に出るのにまかせていた。
それに釣りこまれて主は、石川一口だけで手が回りかねると言った口の下から、やがて、
「……ともかく一度玉麟さんにもお会いして……」
と言った。そんな弱気を見せる時はいつもそうなのか、主はくねくねと身体をくねらせるのだ。

お敬はなにかひどく無気味な感じがした。だが、すかさず、
「……では明日、手前どもにお越し願いまして……」
強引にそう約束させると、そっと嵩高(かさだか)な包み物を主の膝もとに押しやった。
包みの中は、心斎橋くるめ屋の濃藍の久留米の蚊絣一匹。それに新町幾村(いくむら)の佃煮一折。それらはお敬が同じ速記者でも、丸山音次郎より小田都三郎のほうがものごとに勘定高いと聞いて用意した品々だった。

「あんた、ほんまに出しゃばりやなァ」
その夜、そのことを聞かされた玉麟は赤い目をいっぱいに見開いて、いつものもたもた調子で精いっぱい抗議していた。
「……わては知りまへんで……そうやないか。講釈を字にするやなんて、考えたこともあらしまへん。あれはな、石川一口には、はまり役や。彼奴に任しといたら、それでええねん」
「先生。あきません。もう小田先生ときめて来ましてん。明日はここへ先方さんから来てくれますのだっせ」
「へェ。こんなたぶづけ屋の二階にでっか……」
「なにいやはります？　ちょっともかまいません。ええ講釈さえしたらよろしねん」
「ごてやなあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com